

2017.10.19

vol.61

シネマ・ド・リぶらの
コラム・ド・シネマ映画
を
読む

本日の上映作品『荒野の決闘』

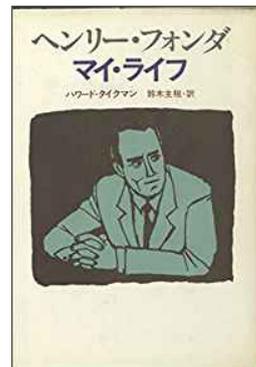
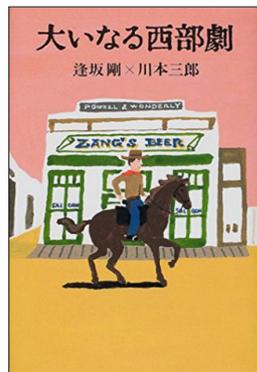
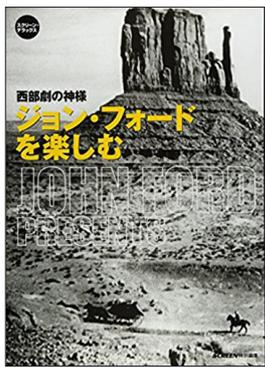


メキシコからカリフォルニアへ牛を運んでいた途中、アリゾナのトゥームストーンへ立ち寄るワイアット・アープとその兄弟。だが、末弟が何者かに殺され、牛も盗まれてしまった。トゥームストンの保安官となったアープは末弟を殺した犯人を捜し、ならず者・クラントン一家と対決の時を迎える。

ジョン・フォード監督の数ある西部劇の中でも、『駅馬車』と並んで最高傑作と評されている詩情溢れる名作。史実であるOK牧場での銃撃戦を題材としているが、アクション映画というよりも、西部開拓時代を風情豊かに描く人間ドラマとしての色彩が強い。原題は「いとしのクレメンタイン」。主題歌は同名のアメリカ民謡。日本の愛唱歌「雪山賛歌」はその替え歌。

監督：ジョン・フォード
 原作：サム・ヘルマン、スチュアート・N・レイク
 音楽：シрил・モックリッジ、アルフレッド・ニューマン
 出演：ヘンリー・フォンダ、リンダ・ダーネル
 ヴィクター・マチュア、キャシー・ダウンス
 製作：1946年 アメリカ 上映時間：97分

『ジョン・フォードを楽しむ』 西部劇の神様		近代映画社	778.253
『誇り高き西部劇』	逢坂 剛／著	新書館	778.253
『西部劇を読む事典』	芦原 伸／著	日本放送出版協会	778.253
『大いなる西部劇』	逢坂 剛／著	新書館	778.253
『西部劇』 サイレントから 70 年代まで	G・N・フェニン／[著]	研究社出版	778.253
『ジョン・フォード伝』 親父と呼ばれた映画監督	ダン・フォード／著	文芸春秋	778.253
『ヘンリー・フォンダ マイ・ライフ』	ハワード・タイクマン／著	文芸春秋	778.253
『ぼくが映画ファンだった頃』	和田 誠／著	七つ森書館	778.04
『私の忘れ得ぬ映画ベスト 10 プラス 1』	丹野 達弥／取材・文	小学館	778.04
『知っておきたい映画監督 外国映画編』	キネマ旬報社／編	キネマ旬報社	778.28



コラム『荒野の決闘』

ジョン・フォードが描いた“OK牧場の決闘” K.M.

今回上映の『荒野の決闘』(1946年製作)は、ジョン・フォード監督の数ある西部劇の中でも、『駅馬車』(1939年製作)と並んで最高傑作と評されている名作です。原作はスチュアート・N・レイクが著した『ワイアット・アープ フロントニア・マーシャル』。主人公は、名保安官としてアメリカの西部史に名を遺すワイアット・アープと、胸を病む元医師のガンマン：ドク・ホリディ(彼も実在)です。

舞台は19世紀後半のアリゾナ州トゥームストーン。テーマは、当時西部開拓のフロントニアであったこの町で起きた、ワイアット・アープ兄弟&ドク・ホリディ対牛飼いのクラントン一家の“OK牧場での決闘”ですが、ジョン・フォードは、史実や原作とは異なる自由な解釈で、アープとホリディの友情、彼らとヒロインたちとの愛の行方、町の人々との交流のエピソード、モニュメント・バレーの絵画のように美しい風景、要所で流れる主題歌「いとしのクレメンタイン」のメロディーを絡ませ、情感豊かな西部叙事詩に仕上げています。

印象に残ったシーンのごく一部を紹介します。

【到着の夜】

夜だというのに喧騒に満ちたトゥームストンの町。到着したアープ兄弟が理髪店で髭を剃ろうとした瞬間、銃声が鳴り響き銃弾が飛び込んできた。泥酔した先住民が拳銃をぶっ放して暴れていたのだ。日常的に銃の撃ち合いがあるが、命が惜しい保安官は頼りにならない。結局、自分と家族と財産は、自分自身の手で守るしかない。そのためのピストルとライフル銃。アメリカに根付いた〈銃文化〉の原点をここに見ることができるシーン。この場面でのヘンリー・フォード扮するアープは、実に頼もしくかっこいい。

【西部の町のシェークスピア劇】

荒くれどもの酒場のステージで、旅の役者がいきなり「To be or not to be, that is the question.」とやり出す。何と「ハムレット」の有名なセリフ。役者は続いてソネットを朗読するが、荒くれどもにはさっぱり分からない。役者が失望して「ここの連中にはシェークスピアは似合わない」と悪態をつく。イギリスのシェークスピアが作った北欧の舞台劇を、アメリカ西部の開拓村で演じて「似合わない」というアメリカ映画を日本で見ているという自分が笑えてきましたが、ジョン・フォードはもう一人の主人公ホリディに、きっとこのソネットを朗読させてみたかったのでしょう。

【平和でのどかな「日曜日の朝」】

朴訥なアープがクレメンタインと一緒に建設途中の教会に赴き、クレメンタインに乞われて、照れながらダンスするくだりが素晴らしい。

【そして決闘】

咳き込んで出した白いハンカチを狙われ被弾するが、それでも死の直前に敵の一人を倒すホリディの最期と、フォード作品の常連であるワード・ボンド扮するアープ兄弟の、鮮やかなファニング三連射で倒される宿敵クラントンの最期は、西部劇的に素晴らしい。

【そして別れ】

荒野に続く一本の道。彼方にモニュメント・バレーの岩山と、ゆったりと流れる雲。見送るクレメンタインに、馬上のアープは「クレメンタイン、とてもいい名前だ」と言って、別れを告げる。その後ろ姿にかぶさる主題歌「いとしのクレメンタイン」。心に沁みるラストシーンです。

9/21 『自転車泥棒』の感想

- ・家族を守るのに必死なお父さん。息子がよかった。
- ・「お父さんもう少ししっかり！」と思わずには…。子供がよかった。
- ・6歳の男の子は何でもわかる！孫と同じで涙がでそう。一人前ですね。
- ・モノトーンの中、前へ進んでネ。息子生きるのよ。
- ・子役の演技がよかった。
- ・初めて観た。最後まで暗い物語だったが、子どもが父親と一緒に押す姿に心打たれた。自転車一台が大事な生活の糧だった時代がよく分かった。
- ・つらいつらい思い出。幸せな日本にきびしさを大切にしたい。
- ・終戦後の日本を思い出します。どここの国も貧しくて、しんどい映画でした。
- ・本日はありがとうございました。この物語の後が心配です。家族のもとに早く帰って下さいね。きっと落ち着きます。
- ・最後に救いもある感じがしました。
- ・終わり方が切なかったですね。警察に突き出されなかっただけでもよかった。生きていればいつかいいことがありますように。
- ・とてもよい映画だ。考えさせられた現実だ。親子の絆が素晴らしく描かれていた。
- ・あまりにも悲しい映画でした。でもよい映画で、以前観た時と違う印象でした。
- ・これを情けないということだ。せっぱつまったのだ。哀れで何とも言いようがない。私も同じようなものだなあ。
- ・今回もありがとうございました。いつも楽しみに観させてもらい感謝！！です。
- ・何とも言えない最後でした。有難うございました。
- ・見たかった作品でした。とても感動しました。
- ・切ない映画でした。でもよかったです。
- ・暗い映画でしたがよかった！
- ・非情に共感しました！
- ・もっと楽しい映画がいいです。

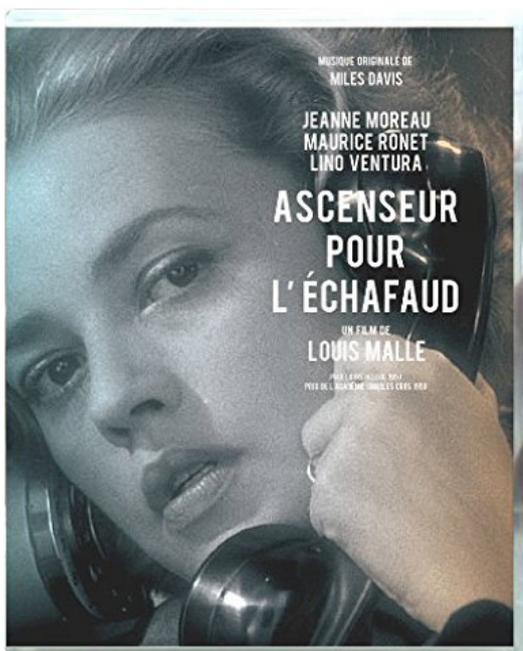


「りぶらまつり 2017」映画上映会

死刑台のエレベーター

字幕上映

Ascenseur pour l'Echafaud



11月11日(土)

りぶらホール 15:15 ~ 16:45

(開場: 15:00 サロンと託児はありません)

フランスの名匠ルイ・マル監督のデビュー作。モダン・ジャズの帝王マイルス・ディヴィスの即興演奏、ジャンヌ・モローのクールな演技が素晴らしい。(1957年ルイ・デリュック賞受賞)

監督: ルイ・マル
原作: ノエル・カレフ
音楽: マイルス・ディヴィス
出演: ジャンヌ・モロー、モーリス・ロネ
ヨリ・ベルタン、ジョルジュ・プージュリー
製作: 1957年 フランス モノクロ 92分

「シネマ・ド・リぶら」映画上映会（第 62 回）

みじかくも美しく燃え

ELVIRA MADIGAN



1889年にスウェーデンで実際に起きた事件を描いた美しい悲恋物語。妻子ある伯爵のスパール中尉（T・ベルグレン）はしががないサーカスの綱渡り芸人エルヴィラ（カンヌ主演賞のP・デゲルマルク）と愛しあい、駆け落ちしてしまう。友人の制止も聞き入れず、あてどない逃走を重ねるが、手配書が回り、やがて金も底を尽き、森の奥深くへ入っていった二人が選んだ結末とは…。モーツァルトの美しい旋律と映像美が際立つ上質なラブロマンス。

監督・脚本：ボー・ウィデルベルイ
出演：ピア・デゲルマルク
トミー・ベルグレン
レンナルト・マルメン
製作：1967年スウェーデン
上映時間：90分



★日時 **12月21日（木）**

① **10:30 ~ 12:00** 開場：10:00

② **14:00 ~ 15:30** 開場：13:30

★場所 **りぶらホール**

★定員 各回先着 **280人**（入場無料・全席自由）

★主催 **岡崎市立中央図書館
りぶらサポータークラブ**

★問合せ **TEL：23-3114 / 070-5252-7263
mail：lsc-office@libra-sc.jp**

託児：500円
（各回5名まで）
申込みは、
1週間前までに。

